

【論文】

マンデヴィルの消費経済論

Mandeville's Fable of Bees and the Economics of Consumption

関 谷 喜三郎
Sekiya Kisaburo

目次

はじめに

- 1 『蜂の寓話』とその時代
- 2 アダム・スミスとマンデヴィル
- 3 消費経済論としての『蜂の寓話』
- 4 社会的通念への挑戦
- 5 おわりに

(要旨)

本稿は、18世紀初頭に出版され、当時のイギリス社会を騒然とさせた、バーナード・マンデヴィルの『蜂の寓話』を経済学の視点から再解釈しようとするものである¹⁾。マンデヴィルは、この本で、「私悪は公益」という過激な表現を用いて、近代に入り消費の季節を迎えたイギリス社会の繁栄を蜂の世界を借りて辛辣に描いている。そこには、消費が生産の拡大を促し、それにより雇用・所得が増大していく姿が描かれている。しかし、無節操に見える消費の増大は、質素を旨とする教会の人々にとっては社会の風紀を乱す行為にみえる。そこで、風紀の取り締まりが求められるようになる。これに対し、マンデヴィルは、自らも奢侈を享受しながら、庶民に儉約を説く上層階級の人々に対して風刺の意味を込めて『蜂の寓話』を書いた。本論では、それが単なる風刺の域を超えて、来るべき消費市民社会の到来を告げる内容を持つという解釈を示している。

はじめに

本稿は、バーナード・マンデヴィルの『蜂の寓話』²⁾について、それが当時のイギリス社会を騒然とさせた奇書であるだけでなく、経済学的考察にもとづく消費経済論としての先駆的意味を有していることを確認しようとするものである。

バーナード・マンデヴィルは、1670年にオランダに生まれている。ライデン大学で医学博士の学位を取る一方で、哲学も学んでいる。その後、ロンドンに渡り、医者として開業し永住することになるが、その傍ら執筆活動を行い、社会的事象に関する著作を数多く発表している。その中の一つに1705年に匿名で公表した『ブンブンうなる蜂の巣—悪者が正直者になる話—』という題名の長編の詩がある。それは、貿易の拡大を背景にして、消費活動が盛んになっていくイギリス社会を風刺したものであり、蜂の世界を借りて、人間の「業」（ごう）ともいべき消費への欲望により社会が繁栄する世界を描いている。当初、詩そのものは人々の注意を引くことはなかった。1714年に詩の内容に関する「注釈」を加えた『蜂の寓話』を出版したが、ここでも世間の目を引くことはなく、その後、「注釈」を増やして、1723年に改めて出版したものが注目されることになる。とくに、副題「私悪すなわち公益」が、宗教・道徳を重視する当時の人たちの目に止まり、厳しい非難を受けるようになる。ミドルセックス州大陪審から告発されることになり、マンデヴィルはその後、批判に対する反論や弁明に追われることになる。

この本は、当時のイギリスの繁栄を人々の放蕩、自負（虚栄心）といった、マンデヴィルのいう悪徳にもとづく行動から説明したものである。そこでは、ヨーロッパが中世・近世から近代へと変化していく中で、消費を通

じて個人が欲求を実現できる社会が到来したことを示している。消費の可能性が広がると、人々の欲望はさまざまな商品の購入に向けられる。それは多くの職業を生み出し、仕事を増やし、雇用を拡大する。それに伴って所得が増加していくと、人々の暮らしは一層豊かになっていく。

『蜂の寓話』を経済学の視点からみると、注目すべきは、人々の消費を求める行動が市場を拡大させる一方で、だれも意図しないにもかかわらず、その繁栄の中にある種の経済的秩序が形成されていく過程が描かれていることである。そこには、単なる風刺を超えて消費を基点とする消費経済論が展開されているとみることができる。

1 『蜂の寓話』とその時代

(1) 「ブンブンうなる蜂の巣」

マンデヴィルの『蜂の寓話』は、巨大な蜂の巣で営まれている蜂たちの社会生活を長編の詩の形で描いたものである。「あるひろびろとした蜂の巣があって、奢侈と安楽に暮らす蜂でいっぱいだった。」³⁾で始まる詩の内容を要約すると次のようになる。

広々とした蜂の巣に蜂の大群が住んでいて、生活は奢侈と虚飾に満ちている。政治体制は立憲君主制であり、人間の世界と同様に多くの労働者が働き、勤勉が奨励され、器械、労働者、船舶、城塞、武器、細工人、技芸、学術となんでも揃っていた。そこでは、人々は渴望と虚栄を満たすために、奢侈を求めて放蕩の限りを尽くしており、生産に労働が追いつかなかった。莫大な資本で大きな利益をあげる者もいるが、食うために体力と手足を使い尽くす者もいた。ありとあらゆる仕事に欺瞞があり、詐欺を知らない商売や地位はなかった。街には詐欺師、博奕打ち、掏摸（スリ）、女衒、贗金づくり、藪医者、占い師となんでもあり、みな金儲けのためにあの手こ

の手を使って私服を肥やしている。見破られるにもかかわらず、石やモルタルが四分の一も入った粗悪な肥料を農夫に売りつける者もいるし、またその相手に塩のたっぷり入ったまがい物のバターを売る農夫もいる。兵士は名誉を目的に戦争し、医者は医術より算術に走り、弁護士は事件をこじらせ金を儲ける。社会的地位の高い人も同様で、大臣は権限を利用し役得を得ている。ジュピター神が信仰されたが、高位の聖職者たちの多くは快樂に耽っていたし、僧侶の多くは無学であった。

しかしながら、このように悪徳に満ちた社会も全体としてみれば「まさに、天国であった。」生産が消費に追いつかないほどの放蕩のおかげで何百万もの人が仕事につくことができた。だが、やがて詐欺や不正は人々の非難の対象になる。自分の利益のために人を騙して巨利を得ている者が他人の欺瞞を非難するようになる。そうした中で、ついにジュピター神が怒り、蜂の巣から欺瞞が一掃されることになる。すると、浪費はなくなり、人々は堅実な生活を送るようになる。だが、その結果、蜂の巣に急激な変化が起こる。物が売れなくなり、価格が下落する。土地・家屋も値下がりし、建築業者の仕事もなくなる。多くの仕事が失われ、巣を後にする者も多くなり、国力の低下は敵の侵入を許すことになる。こうして、繁栄は瞬く間に失われる。

そこから得られる教訓は、悪徳なしで安楽に暮らそうとするのはむなしいユートピアであり、欺瞞や奢侈、さらには自己を過大評価してよく見せたいという自負、といった悪徳が国家の繁栄にとって不可欠である、ということである。すなわち、

ひどい悪徳もなく安楽に暮らそうなどは
頭脳にのみ巣くうむなしいユートピアだ。
欺瞞や奢侈や自負はなければならず
そうしてこそ恩恵がうけられるのだ。⁴⁾

(2) 17世紀後半の消費革命

放蕩による消費の増大がもたらす繁栄を描く『蜂の寓話』を理解するには、それが書かれた当時のイギリスの状況を知る必要がある。17世紀後半から18世紀前半にかけて、植民地の拡大により、イギリスには多くの新奇な商品が流入するようになった。貿易構造の変化が取引を拡大させ、それを取り扱う商業活動が発展していく。とくに、「イギリス」、「西インド諸島・北アメリカ」、「アフリカ」の間での三角貿易はイギリス経済を大きく発展させた。西インド諸島・北アメリカといった植民地からイギリスに砂糖、綿花、米、染料、タバコ、コーヒーなどがもたらされ、そうした植民地にはアフリカから奴隷が労働力として送り込まれた。イギリス本国からは銃器、毛織物、酒、絹織物、金属製品などが植民地に輸出された。また、イギリスは植民地から輸入した商品を自国で消費するとともに、他のヨーロッパ諸国に輸出することで利益を得ることができた。こうした貿易の拡大による多様な商品の流入は、イギリスに「消費革命」という言葉に代表されるような消費文化を花開かせることになる⁵⁾。

当時のイギリスにおける消費文化の繁栄を知る上で象徴的な出来事がある。それは人々の社交の場としてのコーヒーハウスの出現である。1650年にオックスフォードで最初のコーヒーハウスが開店して以来、17世紀後半から18世紀にかけてロンドンを中心に急速に普及し、イギリスにおける社交の場となった。とくに、お茶を楽しむ上層の貴族たちに対し、中産階級の人たちがコーヒーを飲み、知的な話題を論じあい、情報を交換し合う場となる。そこからは新聞や雑誌などの近代的なメディアも誕生している。貿易に伴う危険を議論する場となったエドワード・ロイド経営のコーヒーハウスから世界最大の保険会社ロイズが生まれたという逸話もある。マンデヴィルも『蜂の寓話』の中でこの「ロイ

ド・コーヒー店」に言及している⁶⁾。

イギリスは、ヨーロッパ大陸からだけでなく、新大陸アメリカ、さらにはアフリカ、アジアから大量の消費財を輸入するようになったが、それは、イギリス人の消費を多様化させ、生活革命と呼ばれるほど生活を豊かにしたといわれる。植民地の拡大と貿易による利益の増大は、国内市場を拡大させ、それに伴って労働者の賃金も上昇し、人口も増加していった。

贅沢品を含む消費の拡大は、一方で個人の堅実な生活を墮落させ、労働者を怠惰なものへと変化させていく。それにより、個人の奢侈が公共の風紀を乱し、労働者の怠惰が国家の生産力にマイナスの影響を与えられようになる。「賃金がいいと、労働者たちは食べるためにだけ、というよりむしろ酒を飲むためにだけに働くような放蕩者ばかりだから、労働力の確保はままならない⁷⁾と見られていた時代である。そこで、1690年代に、粗野な風俗を改革し、邪悪な行為を規制しようとする運動が盛んになる。それを進めたのが、風俗改革教会、キリスト教普及協会である⁸⁾。

消費革命により人々の消費生活が格段に繁栄する中で、放蕩という形での個人の道徳的墮落が社会的害悪をもたらし、それが神の教えに背くという観点から、邪悪な行為を規制するための運動が盛んになる。こうした風俗刷新運動に対し、マンデヴィルはそれを風刺する「ブンブンうなる蜂の巣」というパンフレットを匿名で出版する。これが後に大きな反響を呼び、非難的となる。

2 アダム・スミスとマンデヴィル

『蜂の寓話』は市民社会に生きる人間の心理と行動を分析しながら、生活をより安楽にする行為が社会全体としては富の増進をもたらす世界を描いている。それは、当時の奢侈

への批判に対する社会風刺としての側面をもつが、経済学の視点からみれば、奢侈を道徳的問題から経済的問題に転換させたところに大きな特徴があるといえる。

1776年に『国富論』を著わし、経済学をはじめ体系的に展開したことにより「経済学の父」と呼ばれるアダム・スミスを経済学の出発点とすれば、マンデヴィルの『蜂の寓話』は、経済学の歴史が始まる以前の本ということになる。したがって、経済学としての評価を受ける対象には入らない。それが書かれた時代も、18世紀後半の産業革命により資本主義経済が本格的に発展する以前のものである。それにもかかわらず、スミス以後の経済学の歴史の中でマンデヴィルの名前が取り上げられ、その主張が注目される場面がある。そのひとつは、経済学の父アダム・スミスによってなされている。

(1) 学説史における『国富論』

スミスは文字通り経済学を初めて体系化した偉大な経済学者である。宗教的規制のもとで安定的であった中世・近世の社会から、貿易の拡大を背景に競争による利益の獲得が盛んになる近代への転換期において、利得を求める個人のバラバラな行動が市場を通じて社会全体の中にある種の秩序をつくり、社会を豊かにしていくことをはじめて体系的に説明したのが『国富論』であった。

ロバート・ハイルブローナーは『入門・経済思想史 世俗の思想家たち』において、「アダム・スミスが初めて近代社会の真の姿を提示してからというもの、西洋のすべての世界がアダム・スミスの世界と化した⁹⁾として、スミスの経済学が世の中を見るひとつのヴィジョンとなったのであり、これはまさに革命的な出来事であったと述べている。

さらに、ハイルブローナーは、『国富論』の意義を市場法則の定式化に求めている。スミスは、「私利を求めている社会が、まった

くの遠心力だけで飛び散らないでいるようなことが、どのようにして可能なのか。集団の必要に合致するように、各人の私的事業を導いていくものは何なのか¹⁰⁾を説明しようとした。さらに、スミスは「人間の私的な利益と情熱が社会全体の利益にもっとも合致した方向に導かれる¹¹⁾」のは、そこに市場のメカニズムが働くからだとして、それを「見えざる手」という言葉を用いて表現したのである。

(2) 『道徳感情論』とマンデヴィル

スミスは『国富論』において、経済の発展は市場の拡大によってもたらされることを強調し、そのためには利己心にもとづく自由な競争が必要であると述べている。スミスのいう利己心にもとづく行動が社会の富を増すというロジックは、マンデヴィルの『蜂の寓話』における「私悪は公益」と同じである。しかし、『国富論』にマンデヴィルに関する記述はない。

スミスがマンデヴィルに言及するのは、『道徳感情論』においてである。経済学の父、アダム・スミスは生涯に2冊の著作を残している。1759年の『道徳感情論』と1776年の『国富論』である。『国富論』では見えざる手による市場経済の法則を説明しているが、『道徳感情論』においては、個々人が自由に活動する中で、社会がそれなりに秩序だったものになっているとすれば、その社会秩序を生み出す人間の本性とは何かを考究している。人間は私利を迫及する生き物であり、富を獲得することで幸福な人生を送ろうとする。虚栄・野心はそうした活動を強め、それによって経済は拡大していく。ただし、その一方で、そうした利己的性向をもつ人間が、他人の不幸に関心を寄せ、他人の幸福を自分にとって必要なものと感じることがある。人間は自分の利害に関わらず他人を観察することによって、自分も何らかの感情を引き起こす存在であると、スミスは考える。そ

して、それは何であり、どのように説明することができるかを『道徳感情論』で論じている。

スミスは、人間は他人の目を意識し、他人から是認されたいと願う傾向があり、それは人類共通の心性であると考え。また、他人の感情や行為に関心をもち、それに同感する能力をもつ。人間はこうした感情をもちながら、自分の行為が他人から同感を受けるようにするには、自分自身の中に自分の感情や行為が適切であることを確信することができる基準をもたなければならない。そのために必要なのが、自分に対して特別な好意や敵意をもたない「公平な観察者」である。人間は胸中に公平な観察者を形成し、自分の感情や行為が公平な観察者から非難されないように努力すると考えることができる。スミスは、人間はこうしたより高次の能力を身につけることができるとみている。

人間には徳と英知を獲得し胸中の観察者から称賛を得る道があると説く一方で、富や地位を求める者はしばしば虚偽、陰謀、結託、贈賄などを企てることがある。しかし、スミスは多くの場合その企ては失敗に終わり、それが成功して富を得たとしても、その過程で行う不正な行為によって幸福感を失うことになる¹²⁾と説く。ゆえに、スミスは富を求める野心を認めながら、正義に合った競争が必要であり、フェアプレイのルールにしたがった競争こそが社会の秩序と繁栄をもたらすと主張する¹²⁾。

人間の行動をこのように考えるスミスの見方は、社会の繁栄は悪徳のおかげであり、商業社会を支えているのは放蕩や虚栄であるとするマンデヴィルの考え方とは相いれない。スミスは「あらゆる情念を、いかなる程度においてもいかなる方向においても、まったく悪徳なものとしてえがいていることは、マンデヴィル博士の本の大きな誤謬である¹³⁾」として、マンデヴィルの人間に対する見方を否

定する。さらに、私悪が公益をもたらすと主張するマンデヴィルの見方に対し、「かれは、すべてのものごとを虚栄としてあつかうのであり、虚栄は、他の人びとの諸感情がどうであるかに、あるいはどうであるべきかに、なんらかの依存関係をもつのである。そしてこの詭弁を手段として、かれは、私的な諸悪徳は公共的な諸利益であるという、かれの好きな結論を確立する」¹⁴⁾として、それが受け入れ難いものであることを記している。

ただし、スミスも人間には富を求める野心があるので、虚栄が経済を発展させるというマンデヴィルの主張にも一抹の真理があることを認め、「(マンデヴィルの)この体系がどんなに破壊的にみえうとしても、もしそれが若干の点で真理に境を接していなかったならば、あのように多数の人びとを欺瞞することも、もっとすぐれた諸原理の味方であった人びとのあいだに、あのように一般的な驚愕をひきおこすことも、けっしてありえなかっただろう。」¹⁵⁾と述べている。

(3) 『国富論』とマンデヴィル

人間の本性に関する理解について、スミスはマンデヴィルを認めなかったが、経済理論の側面については、別の解釈の余地がある。すでに述べたように、『道徳感情論』では、かなりのページを割いてマンデヴィルの主張に反論しているが、不思議なことに『国富論』では全く触れていない。

スミスは『国富論』において、個人の利益追求の行動が社会全体の利益に合致する方向に向かうと主張した。市場では誰でも利益を求めて好きなように行動することができる。しかし、生産や価格がその社会の求める水準を逸脱すると、そこに見えざる力が働いて適切な水準に連れ戻してくれる。この市場における自己調整機能こそ、スミスが「見えざる手」と呼んだ市場メカニズムである。このメカニズムを有効に機能させるのは、市場にお

けるフェアな競争である。競争を通じて人々の利己的動機にもとづく活動が、雇用・所得を増やし、市場を拡大させ、国家全体の富を増進させることになる。

利己心が経済活動の動機であり、それが経済活動を活発化させ、生産を拡大し、雇用を増やし、社会をより豊かにしていく。こうした面に注目すると、スミスの主張はマンデヴィルが『蜂の寓話』で描く世界と似ている。スミス自身、『国富論』において、「われわれが食事ができるのは、肉屋や酒屋やパン屋の主人が博愛心を発揮するからではなく、自分の利益を追求するからである」¹⁶⁾と述べ、経済活動における利己心の働きを重視している。『道徳感情論』で取り上げたように、スミスは『蜂の寓話』を読み、その内容を批判しうるほど検討している。ゆえに、マンデヴィルが描いた経済的繁栄に関する論理展開をスミスが理解していたという事実注目すると、スミスの市場経済に関する見方にマンデヴィルの『蜂の寓話』が少なからぬ影響を与えていると考えることができよう。

こうした見方を傍証するものとして、シュンペーターの『経済分析の歴史』における次のような記述がある。すなわち、「彼(マンデヴィル)はこの書物のなかで、社会的には好ましくない行動を生む個人の動機でも、道徳的にはいかがわしいものがないわけではないということを示そうと努力した。アダム・スミスは他の有徳廉正な士と同じく、この論作に対して心よからざるものがあつた。この書はまさに消費の賛美と貯蓄の非難並びに若干の「重商主義的誤謬」を含み、これらがスミスを不快ならしめたに違いない。しかしそれ以上にスミスの敵意を誘うものがあつた。スミスは、マンデヴィルの議論が、特殊な形で書かれてはいるものの、スミス自身の純粋な自然的自由に向かう議論にほかならないことを見逃さなかつたはずである。読者は、この事実がいかにわが尊敬すべきスミス教授

に衝撃を与えたか—ことにスミスが、人を憤慨させるこの小冊子から、何ものかを学びとったような場合には一を認めるのに何の困難も感じないであろう。』¹⁷⁾

ここには、『国富論』で展開された市場経済に関する独創的な分析について、すでにマンデヴィルの中にそのアイデアが盛り込まれていることに対して、スミスが受けた衝撃の大きさが指摘されている。マンデヴィルは『蜂の寓話』において、消費が経済の繁栄をもたらすことを強調しているが、それは生産の拡大を通じてであり、生産が拡大すると雇用および所得が増え、それがさまざまな職業を生み出し、市場を拡大させることにより経済を繁栄させると指摘する。そこには、経済の繁栄は分業による市場の拡大によってもたらされることを強調したスミスと同じ世界が展開されている。すなわち、「商売や製造業の種類が多ければ多いだけ、それらが骨の折れるものであればあるだけ、多数の領域にわかれていなければならないだけ、ますます大勢の人間がおたがいに邪魔することなく社会のなかに包含され、いっそうたやすく富裕で強力で繁栄する国民になるであろう。』¹⁸⁾経済分析の先駆者を自負するスミスには、この記述が許せなかったというのがシュンペーターの解釈である。

たしかに、『国富論』における市場の描写には、マンデヴィルが展開したことと同じことが書かれている。とくに、利己心にもとづく消費行動が市場を拡大させ、雇用・所得を増大させることにより、経済の繁栄をもたらすという点では、マンデヴィルの描く世界と同じである。ただし、マンデヴィルには、放蕩を公益に変換する市場のメカニズムについての説明はない。自己の利益の追求が結果として社会を富ませ、社会的厚生を高めるのは市場の調整機能によるものであり、その説明こそ経済学としての『国富論』の最も主要な理論的貢献である。その理論展開はマンデ

ヴィルの世界を遥かに超える、まさにスミス自身が展開した経済学の世界におけるものである。

また、そこには、マンデヴィルが描いた産業革命前夜の消費革命の世界と、スミスが見た増大する需要に答えるためにいかにして生産の拡大を図るかという課題をもつ世界との違いもあるといえる。18世紀後半のスミスの時代になると、工場における生産の拡大が国を豊かにするための最も重要な課題となる。スミスはそれに応えて、『国富論』において分業による生産性の向上と貯蓄による資本蓄積の必要性を説いている。貿易を通じた世界的な市場の広がりを中心に、生産が必要に追いつかない状況に対し、いかにして生産を拡大するかが経済学に課された課題となる。ゆえに、消費の重要性は経済分析の対象から外れ¹⁹⁾、「供給はそれ自らの需要を創造する」というセイの法則の世界が経済学の基本命題となる時代に入る。それ以後、古典派経済学においてマンデヴィルが取り上げられことはなくなる。リカードとの論争におけるマルサスによる需要の重要性の指摘を除けば、マンデヴィルの重視した見方が経済学の世界で注目されるのは約200年後である。

3 消費経済論としての『蜂の寓話』

(1) ケインズとマンデヴィル

マンデヴィルは、経済の繁栄は消費によってもたらされると主張した。強欲によって集めたものを放蕩によって散財することで生産物が売れ、それが一層の生産拡大を促し、雇用を増やす。それは働く人に所得をもたらす、さらなる消費を可能にする。そこには、消費→生産→雇用→所得→消費という、消費を始点にする経済の循環的拡大が示されている。

マンデヴィルの詩には「悪の根源をなす強欲が、奴隷としてつかえた相手は放蕩であ

り、あの気高い罪であった。他方で奢侈は貧乏人を百万も雇い、いとわしい自負はもう百万雇った²⁰⁾という一節がある。マンデヴィルにとって、人間の悪は強欲でありそれが詐欺、欺瞞にまみれた蓄財をもたらすが、実はそれがもう一つの悪である放蕩を支えている。しかも、しばしば同一の人間の中に強欲と放蕩という2つの悪徳が潜んでおり、乱費を生み出す。マンデヴィルはそれが人間の本質的性向であることをさまざまな場面を借りて強調している。それが経済の繁栄をもたらすのであり、これを経済学の視点からみると、「支出は他の誰かの所得を生む」ということである。

この命題が再び注目されるのは、『蜂の寓話』が世間の非難を浴びてからおよそ200年後の1936年である。それは、20世紀最大の経済学者である、ジョン・メイナード・ケインズが1936年に著わした『雇用・利子および貨幣の一般理論』（以下、『一般理論』と表記する）においてである。1929年にアメリカでの株の大暴落をきっかけに発生した大恐慌は、世界中を深刻な不況に巻き込み、生産の大幅な低下と大量失業の発生をもたらした。それは資本主義経済最大の危機であった。こうした状況において、既存の経済学は何ら有効な処方箋を示すことができなかった。これに対し、ケインズが『一般理論』を著わし、「有効需要の原理」という命題を基本にして、不況の原因を解明し、失業救済のための処方箋を提示した。その基本的な考え方は、生産は需要があつてはじめて実現するのであり、需要が多ければ生産も拡大するが、需要が少なければ生産は減少せざるをえない。生産が少なければ、必要とされる労働者も少なくなるので、必然的に失業が生じてしまう。ゆえに、生産・雇用を左右するのは需要の大きさである、ということである。これは、増大する需要に応じるために生産の拡大こそ必要であると考えられた時代の経済学

では説明できない事態であった。

供給が需要を創造するという正統派経済学から、需要が供給を左右し、生産水準を決めるという発想の転換をもたらしたのがケインズである。そこでは貯蓄に代わり、消費が美德となる。ここにマンデヴィルが再評価される素地があるといえる。ケインズの『一般理論』には、不景気で需要が増加しない場合には、たとえピラミッドの建設でも需要の増大が生産を促すという記述がある²¹⁾。まさにそれと同じものが、『蜂の寓話』の中にもっと過激な表現で示されている。すなわち、「ほとんど十万ポンドの年収があり、その富を相続する身内もないのに一年で五十ポンドしか使わない意地悪のけちん坊が、五百ギニーか千ギニー盗まれたとすれば、次のことは確かだ。すなわち、このお金が流通するようになると、たちまち国家はその強盗のおかげでかえってよくなり、あたかも大主教がそれだけの金額を公共のために残した場合と同じ、真の利益を受けることになるであろう。」²²⁾、そこには、お金が経済に出回ることが繁栄の要件であることが強調されている。また、マンデヴィルは、道徳的観点から国民の浪費を戒める動きがあることに対し、「一般に国民の乱費とか儉約は、国の豊かさや生産高、国民の総数、課せられる税金といったものにたえず左右されざるをえず、彼がどう逆らおうともそれらに比例するであろう」²³⁾と述べることにより、消費、そして貯蓄の大きさは一国の経済水準によって決まるというケインズの世界と同じ認識を示している。

さらに、重要なことは、「国民を幸福にし、いわゆる繁栄させるための重要な方法は、すべての者に雇われる機会をあたえることである」²⁴⁾が、そのためには、経済が成長することが必要であるとして、「国民の偉大さと至福が期待されなければならないのは、こうした方策からであつて、浪費や儉約についてのつまらない規制からではない。（そのような

ものは、国民の境遇に従っておのずと定まっていこう(であろう)。たとえ金銀の価値が上がり下がり、あらゆる社会の享樂は、大地の実りと国民の労働にもとづくであろうからだ²⁵⁾と述べている。ここには、単に放蕩を奨励するのではなく、消費による経済成長こそが生活の豊かさをもたらす、という認識が示されているといえる。

ケインズは『一般理論』において、自らの理論がそれまでの古典派経済学の考え方を一掃するほど革命的な内容を持つものであることを自負していたが、一方で自らのアイデアの先駆者を丁寧にも評価している。その一人がマンデヴィルであった²⁶⁾。

ケインズは、『一般理論』において、需要に応じて一国の生産水準が決まるという有効需要の考え方を貯蓄・投資所得決定論という形で理論化した。それはマクロ経済においては、生産水準は需要の大きさに見合う水準に決まるというものであり、それを別の視点からみると、貯蓄と投資が一致する点に国民所得の水準が決まるということである。マクロ経済からみれば、貯蓄は消費を抑えることなので、それだけ需要は減る。一方、投資は資本財を購入するので需要の増加となる。そこで、貯蓄が投資を上回ると需要不足で経済は停滞し、投資が貯蓄を上回ると経済は拡大することになる。結局、一国の生産水準は貯蓄と投資が一致するところで決まる。これが貯蓄・投資所得決定論である。

需要に応じて国民所得が決まるという経済の現実を1つの理論として体系化する意義はどこにあるのか。それは、その理論がなかったらならば見えなかったものが見えてくる、ということである。個人としては貯蓄を増やすことが富を増大させる手段となるが、もしみんなが今より貯蓄を2倍にしたら、社会全体で貯蓄を2倍にすることができるであろうか。そうはならないことを教えてくれるのがこの理論である。なぜなら、今より貯蓄を増

やそうしたら消費を切り詰めざるを得なくなるが、消費を減らすと、それに応じて投資が増えない限り、生産が減り、雇用・所得が減少し、その結果として貯蓄も減ってしまうからである。しかも、企業が貯蓄の増加に応じて投資を増やす必然性はない。これが、有効需要の原理の教える経済の現実である。これにより、生産・雇用を増やすためには、需要が必要であり、そのためには、それまでの経済学が教える「貯蓄は美德」から「消費は美德」に視点を変える必要がある、ということになる。

ケインズの貯蓄・投資決定論が教えるのと同じことをマンデヴィルも指摘している。すなわち、「節約と呼ぶ者もいるこの慎重な節用が、個人の家庭では財産を増やすいちばん確かな方法であるごとく、……国家全体にも同じ効果をもたらし、そして、たとえばイギリス人がある隣国人たちのように儉約しようものなら、現在よりはるかに富むことができるであろう、とある人々は考えている。これは誤りだと思う。」²⁷⁾

ここでは、個人が貯蓄を増やせば、経済全体としても貯蓄を増やすことができるという考え方が誤りであることを指摘している。これはケインズのいう「合成の誤謬」と同じである。ゆえにケインズも、儉約が経済の停滞をもたらすというマンデヴィルの指摘には理論的根拠があると評価しているのである²⁸⁾。

なぜ、ケインズによって再評価されるまで、マンデヴィルの教義は2世紀以上にわたって経済学者に注目されることがなかったのであろうか。ケインズによれば、それは古典派経済学のもつ「健全な救済策は個人および国家による極度の節儉と儉約以外にないという峻厳な教義」²⁹⁾にある、ということである。これまで、日常生活を経済的に律する儉約は、道徳に適うだけでなく、経済の発展にとっても合理的な行動と考えられてきた。なぜなら、スミスに始まる古典派経済学が直面

した問題は、拡大する市場において増加する需要に対応するために、いかに生産を拡大するかということであったからである。生産のためには資本の蓄積が求められる。そのためには消費より節約が重視された。消費を抑えてその資金を用いて資本を蓄積することが、より多くの労働者を雇い、設備を増加させるために必要であった。ゆえに、貯蓄は美德と考えられた。

マックス・ウェーバーが1905年に『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で描いたように、近代資本主義の発展の原動力は、節約であった³⁰⁾。アダム・スミスが見ていた世界も同じである。そこでは節約による資本蓄積こそ経済発展にとって必要と考えられた。それゆえに、スミスもマンデヴィルの言う利己心こそ経済を進展させるとする思想の一部は受け入れたが、「支出は他の誰かの所得を生む」あるいは「誰かが支出しない限り所得は生まれない」という、マンデヴィルの世界にある経済学上の重要な命題は引き継がなかったのである。

しかし、19世紀に入ると、生産技術の発展により、供給能力が飛躍的に拡大する。それにより、やがて供給が需要を上回ることになる。過剰生産の発生である。19世紀に入ると、それは8年から10年の周期で不況をもたらすことになる。過剰生産による不況がピークに達するのが1930年代の大恐慌である。大量失業の発生という現実を前に、資本主義経済にはなぜ失業が発生するのかを説明する理論がケインズによって展開されることになる。そこで展開されたケインズ理論の着想は、マンデヴィルが『蜂の寓話』で展開した消費が経済の繁栄を決めるという考え方と同じである。

(2) 消費の社会的役割

マンデヴィルの『蜂の寓話』には、ケインズによる有効需要論としての再評価だけでなく、

消費の社会的役割の認識という面もある。そこには、蜂の世界を舞台に描かれた消費生活を通じて、消費社会という新たな時代の到来と、消費行動が経済社会に与える影響を重視するという、これまでになかった視点が示されている。

17世紀後半の消費を中心とする豊かな社会は、人々が個人の欲望、すなわちマンデヴィルの言う悪徳にしたがって行動することによって生み出された。そこには社会階層にかかわらず、社会の中で自由に消費行動を行う消費者が描かれている。そこで注目すべきは、消費の道徳的側面ではなく、有効需要としての消費である。マンデヴィルはそれを詩の中でこう歌っている、

他方で奢侈は貧乏人を百万も雇い、
いとわしい自負はもう百万雇った。

こうして悪徳は巧妙さをはぐくみ
それがじかんと精励とに結びついて、
たいへんな程度にまで生活や便益や
まことの快樂や慰安や安樂を高め、
おかげで貧乏人の生活さえ
以前の金持ちよりもよくなって、
足りないものはなくなった。³¹⁾

そこには個人の強欲と奢侈が意図せざる形で人々の暮らしを豊かにする様が描かれている。そこでは、「各部分はすべて悪徳に満ちていたが、全部がそれえばまさに天国であった。」³²⁾さらに、重要なことは、ハイエクが指摘するように、マンデヴィルは、経済活動が「ある秩序を設計なしで自己形成するかについて正確に示したことはないだろう。しかし、彼はその秩序がそのように自己形成したことを十分に明らかにした」³³⁾のである。つまり、人々の自由な消費行動が誰かに計画されたのではないにもかかわらず、ひとつの調和を生み出し、社会を繁栄へと導いていく。

マンデヴィルはそこに生み出される社会的秩序の形成に言及している。

これはアダム・スミスの見えざる手による市場メカニズムと同じ着想であり、そこで重視されるのは、個人の道徳問題ではなく、消費行為が生み出す経済的影響である。ハイエクによれば、マンデヴィルは社会の秩序や文化は個人の行為の結果であるが、それは意図的に考案されたものではなく、そうした中で作られ、歴史の中で有益なものとして残ってきた制度や習慣やルールによって導かれてきたと指摘したのである。『蜂の寓話』では、「こうした幅広い命題を彫琢するなかで初めて、秩序立った社会構造の自生的成長のあらゆる古典的範例、すなわち法や道徳、言語、市場や貨幣、さらには技術的知識の成長について論じ」³⁴⁾られている。

マンデヴィルの時代は、産業革命を生み出す前夜であり、利潤を求める自由な活動が多様な消費財をもたらし、消費文化が花開く時代である。そこでは、人々の消費は単なる人間の欲望の発露に留まることなく、経済社会の発展をもたらす。消費は生産を支え、雇用を生み、経済を繁栄させる原動力となっている点で、社会的に評価されるべき側面をもつとマンデヴィルは考えたのである。

(3) 新たな消費者像

マンデヴィルは、消費が多様化する中でさまざまな職業が生み出されるが、それを実現するのは人々の奢侈にあるとする。そこには、特定の貴族などの特権階級だけでなく、貿易や国内の商業取引で多額の利益を手にする商人や中流階級の人たちの消費行為も含まれている。内外の活発な商業活動によってイギリス社会にもたらされた多様な奢侈品は、人々の消費生活を豊かなものにしていく。これに関して、メイソンは『顕示的消費の経済学』において、「17世紀の……奢侈的消費は、あらゆる社会的・経済的階層において見いだ

されるものであり、有益なものとして鼓舞されるものである……マンデヴィルは、奢侈的消費や顕示的な経済行為は、もはやたんに金持ちだけの放蕩として無視することはできず、あらゆる消費者の経済的行為を決定する上で、また国家の繁栄を導く上で、主要な要素であることみなされねばならないと論じることによって、奢侈的消費や顕示的な経済行為を正統的経済思想の考察課題にさせようとした」³⁵⁾と述べている。

そこには、社会的な階級の違いを超えて、多くの人々が消費者として経済を繁栄に導く役割を果たす社会の到来が描かれている。しかも、消費が多様化する中で、人々は消費に社会的なステータスを顕示する可能性を見出すようになる。その結果、社会の中で自分より上の階級の消費を模倣するようになる。それが流行をつくり、消費を増大させる。そうになると、消費は自分の必要を満たすためだけではなく、自己顕示の手段となる。そこには、後にヴェブレンが『有閑階級の理論』で展開した世界がそのまま描かれている。とくに、マンデヴィルが人間の本性としての自負の消費効果を重視している場面では、消費の顕示効果が強調されている。そこでは、人々が消費を通じて社会を認識し、社会的地位を確認するようになるために、消費の目的が単に個人の必要や欲求を超えて社会的意味を持つようになる消費社会論が展開されているとみることができる。

4 社会的通念への挑戦

マンデヴィルの『蜂の寓話』の革新性を消費の社会的役割の分析に見出すことができるというのが、消費経済論の視点からみたマンデヴィル解釈のひとつである。しかも、そこには部分的ながらスミスやケインズの理論に関する先駆的アイデアも含まれている。

次に、マンデヴィル解釈におけるもう一つ

の側面に注目する。それは社会的通念への挑戦である。経済学における社会的通念への挑戦として直ちに想起できるのは、1958年に出版されたガルブレイスの『ゆたかな社会』である。ガルブレイスはこの本において、それまでの経済学が市場を分析する際に前提とする消費者主権についての通念を覆そうとした。すなわち、経済活動は企業などの生産によって推進されるが、市場では家計の必要とするものを生産することで消費者に受け入れられる。ゆえに、家計に経済活動の主導権があるというのが市場経済に対する従来の見方であった。しかし、現実には、市場の主導権を握るのは企業である。そこで、家計の消費は広告・宣伝を通じて企業の生産活動に依存しているとして、通説に反旗を翻し、主流派経済学の教義に挑戦したのがガルブレイスであった。

(1) ジョーン・ロビンソンの指摘

ガルブレイス以前に、社会的通念に挑戦した経済学者が二人いる。それがケインズとマンデヴィルである。ケインズの弟子で、ケインズ経済学の誕生を間近で支えたジョーン・ロビンソンは『経済学の考え方』の中で、ケインズとマンデヴィルの間には、有効需要以外に根本的なところで共通するものがあると指摘している。それが社会的通念に対する挑戦である。

ケインズは1936年に、後に経済学の世界に「ケインズ革命」と称されるほどの影響を与えることになる『一般理論』を出版している。それは、アダム・スミス以来の正統派経済学の教義を変革しうるものであった。ケインズは、需要が不足する可能性を前提としない既存の経済学では、需要不足による不況の発生を説明できないにもかかわらず、それを認めようとする正統派経済学を批判し、新たな命題のもとに新しい理論を展開した。そこで提示された理論は、経済学の歴史を大き

く変える革新的な内容をもつものであった。ただし、『一般理論』出版直後には、それは必ずしも正当に評価されたわけではなかった。

ロビンソンによれば、ケインズの『一般理論』が容易に受け入れられなかったのは、理論の難解さにあるのではない。ロビンソンは『経済学の考え方』の中で、理論は冷静に対応すれば理解できる範囲であり、問題は別のところにあるとして、次のように述べている。すなわち、『一般理論』の受け入れをあれほど困難にしたものは、その知的な内容[の高さ]ではなく—これは冷静な気持ちで接すれば容易に修得しうるものである—、心胆を寒からしめたその書物の含意であった。私的な悪徳は公共の利益というのも問題であったが、それにもまして新しい学説は、(節約や慎ましい家計という)私的な美徳が公共の悪徳にほかならないと考えるはるかに攪乱的な命題であるようにみえたのである。』³⁶⁾

「貯蓄は美徳」という道徳的に支持されるべき生活信条に対し、失業に苦しむ市場経済の現実において妥当性をもつのは「消費は美徳」である、というケインズの主張は社会的通念に反するものであった。もちろん、『一般理論』を注意深く読めば、単に貯蓄が悪いということでないことはわかる。貯蓄が問題なのは、それが投資に利用される保証がないからである。貯蓄は消費する代わりにお金で保有することであるから、貯蓄すれば、それだけ消費が減ってしまう。もしそれが投資という形で支出されなければ、有効需要の減少が生産の低下を招くことになる。

しかし、ケインズはこのことを主張するとき、論争的にならざるをえなかった。なぜなら、「困難は、新しい思想にあるのではなく、大部分のわれわれと同じように教育されてきた人々の心の隅々にまで広がっている古い思想からの脱却にある」³⁷⁾からである。その結果として、出版当初の『一般理論』に拒否反応を示す動きがあったといえる。つまり、「当

時のケインズの見解は、マンデヴィルの体系がアダム・スミスにとってそう見えたよりもずっと厭うべき1つの「放恣な体系」を支持しているように見えた。そして、たしかにケインズは、マンデヴィルと同様に、恐るべき天の邪鬼であった。かれはわざと、そのにがい丸薬に口あたりのよい砂糖のころもなど全然つけないうことにした。のみにくければのみにくいほど、よくきくであろうというのである。』³⁸⁾

(2) マンデヴィルの通念に対する挑戦

マンデヴィルもあえて「天の邪鬼」のような表現をしたことが多くの反感を買い、その主張を受け入れがたいものにしたように思われる。経済学、社会学、心理学、さらには人間行動学の先駆けないしは創始者となりえたであろう内容を有し、経済学説史の先駆的業績として評価される要素を多分に含みながら、『蜂の寓話』がキワモノのような書物として扱われたのは、マンデヴィルの極端に挑戦的な表現にも原因があるように思われる。

マンデヴィルが言いたかったのは、経済社会の繁栄のためには、生産が必要であり、そのためには消費が不可欠であるということである。しかし、それは浪費を慎み、質素に暮らすべきであるという社会的通念に反するものであった。

マンデヴィルは宗教による消費生活の抑制も経済活動を衰退させ、人々を貧しくさせると主張した。そこには、当時の宗教家や上流階級への批判もあった。ルターやカルバンの宗教改革についてさえ、経済の繁栄の観点からはほとんど役に立たないとして、次のように述べている。「わたしは、ルターやカルバンあるいはエリザベス女王と同じくらい、カトリック教に反対であるけれども、宗教改革はそれを奉じた国王や国家を他国よりも繁栄させるのに、綸骨張りで刺し子にしたスカートの、愚かで気まぐれな案出以上にほとんど

役に立たなかった。』³⁹⁾ここでも、あえて過激な表現を用いたとみられる。

マンデヴィルが描き出そうとしたもの、それは近代に向かって発展していくヨーロッパ社会の中で、消費を生み出す人々の欲求が生産を拡大させるだけでなく、新たな商品の開発を促し、それがさらに仕事をつくり出し、市場を拡大させていく消費社会の姿である。さらに、上流階級の消費がやがて流行となり、社会全体に行き渡り、消費生活をより豊かなものにしていく。このようにして、人々の消費行動が経済社会をリードする消費市民社会の到来を予見したといえる。

社会的通念への挑戦において、ガルブレイスは資本主義経済が大企業体制のもとで消費者主権から生産者主権に変化したという事実を指摘した。ケインズは、貯蓄が投資需要を生み出すという見方に対し、経済活動における貯蓄の意味は、第一義的には消費需要の抑制に他ならず、それは有効需要を削減し、生産を停滞させると主張した。マンデヴィルは、生活は質素・儉約が望ましいという見方を重視する社会にあって、消費者が経済活動の主役になる時代が到来したことを強調した。消費者による消費の増大が生産を刺激し、それが生産を質・量ともに変えていく。そこには新たな消費文化が生まれる。その意味で、消費者の強欲と奢侈は、単なる個人の欲を超えて社会的意義を持つ、というのがマンデヴィルの主張であったとみることができ

5 おわりに

「経済学者の仕事はわれわれに何をなすべきかをのべることではない。むしろ現に知らず知らずに行っている行為がうまく原則に適合している理由を説明することである」⁴⁰⁾というロビンソンの言葉に従うと、まさにマンデヴィルは人間の本性に従う消費行動が市場

を通じて社会を繁栄させるメカニズムを説明しているといえる。それが「私悪すなわち公益」という表現に要約されている。そこには、消費者という近代社会における新たな経済主体の出現と、消費活動が生み出す社会的役割が強調されている。

最後に、マンデヴィルの限界について指摘しておきたい。マンデヴィルは『蜂の寓話』において、社会の繁栄の源は消費にあることを強調した。ゆえに、消費の重要性を指摘する記述が繰り返し出てくるが、そこには需要に対応する生産について、それを拡大するための投資の増加や資本蓄積に関する説明はない。資本の増加がないところでどのようにして生産の拡大が可能になるのか。これに関して、マンデヴィルは消費を賄うための生産は労働によって行われるとしている。アダム・スミス以前の経済活動が主に小さな作業場での手工による生産が主であった時代を前提にすれば、マンデヴィルの説明は妥当なものである。ゆえに、労働による生産を通じて豊かさが実現できる。では、誰が労働するのか。

これについて、マンデヴィルは、「最高の奢侈が見られるのはものすごく人口の多い国家だけ、しかもこの上層部だけであって、ずっと大きな役割をも占めている大多数は、すべてをささえる基礎である最下層、大勢の労働貧民でなければならないのである。」⁴¹⁾と述べている。マンデヴィルは、奇しくも、比喩に用いた蜂の世界と同様に、多くの人たちを働き蜂とみなしている。その働き蜂である最下層の人たちの所得はどう見られていたの

か。「働き手を勤勉にするただ一つのは、適度な額のお金のみである。というのは、あまりに少なすぎると。その気質に従って落胆させるか自暴自棄にさせるように、あまりにも多すぎると、尊大で怠惰にさせるであろうからだ。」⁴²⁾とどのつまり、賃金は生存水準に留めておくことが望ましいということである。では、下層労働者はどのように扱えばよいと考えていたのか。

「よく統治された国家において、すべての困難なよごれ仕事は貧乏人の割り当てであり分け前であるべきであって、その子供たちを十四五歳まで有用な労働からそらすのは、成長したときにそれに適した人間とするには間違った方法である、というのがわたくしの意見である。」⁴³⁾

こうした記述から、マンデヴィルは、下層階級の人々には社会の底辺の仕事させるべきであり、賃金も生存水準が望ましいと考えていることがわかる。つまり、消費による繁栄を強調しながら、その消費は中流以上の人々のものであり、下層階級の人々はその対象になっていない。その意味で、マンデヴィルの消費経済論は現代の視点からみればきわめて限定された社会階層にしか当てはまらないものである。そこには、当時の人たちの労働者に対する偏見があり、マンデヴィルもその例外ではなかったといえる⁴⁴⁾。ただし、その当時の時代状況を踏まえれば、消費社会の萌芽を示すものとしての『蜂の寓話』の意義は大きいといえるのではないだろうか。

(注)

1) マンデヴィルの『蜂の寓話』は、出版当初からその後に至るまで、多くの議論を呼び、それに呼応する形でさまざまな論文が書かれている。その表的なもの、シャフツベリーからハチスン、アダム・スミスに至るマンデヴィル批判で

ある。これらについては、田中敏弘(1966)がその内容を詳細に検討している。また、田中敏弘(1984)には、『蜂の寓話』出版以降、18世紀から20世紀に至るマンデヴィル研究の歴史的な系譜がまとめられている。これまでのマンデヴィル研究については、その主な流れをこの2

マンデヴィルの消費経済論

- つの著作を通じて知ることができる。その研究の多くは、マンデヴィルの経済思想を中心にしたものである。
- 2) マンデヴィル (1732)
 - 3) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.11
 - 4) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.34
 - 5) 山口正春 (2014) の第 6 章「商業革命から産業革命へ」において、17 世紀におけるイギリスの商業的繁栄とそのもとでの消費の拡大が説明されている。
 - 6) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.57
 - 7) ハイルブローナー (1998) 邦訳, P.35
 - 8) ホーン (1978) の第 1 章「マンデヴィルと風俗改革」において、風俗改革教会の活動内容が記述されている。
 - 9) ハイルブローナー (1998) 邦訳, P.64
 - 10) ハイルブローナー (1998) 邦訳, 85
 - 11) スミス (1759) 邦訳, 『道徳感情論 (下)』 P.85
 - 12) これについては、堂目 (2008) の第 1 章および第 2 章を参照。
 - 13) スミス (1759) 邦訳, 『道徳感情論 (下)』 P.328
 - 14) スミス (1759) 邦訳, 『道徳感情論 (下)』, P.328
 - 15) スミス (1759) 邦訳, 『道徳感情論 (下)』, P.330
 - 16) スミス (1776) 邦訳, P.17
 - 17) シュンペーター (1954) 邦訳, PP.331-331
 - 18) マンデヴィル (1732) 邦訳, 338
 - 19) スミス自身, 『国富論』において、「消費こそがすべての生産の唯一の目的」(邦訳, P.250) であると述べながら、「これはまったく自明な点なので、証明しようとする必要すらばかっているといえるだろう」(邦訳, P.250) と記していることから、経済学として消費を問題にする必要はないとみていたと考えられる。
 - 20) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.21
 - 21) ケインズ (1936) 邦訳, P.129。さらに、ケインズは極端な比喩として、大蔵省が古い壺に銀行券をつめたものを廃坑に埋めて、それを企業に掘り出させることでも失業の解消には役立つと述べている。(1936) 邦訳, P.128
 - 22) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.82
 - 23) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.168
 - 24) マンデヴィル (1732) 邦訳, 180
 - 25) マンデヴィル (1732) 邦訳, 180
 - 26) ケインズは、『一般理論』の「第 23 章 重商主義その他に関する覚書」の中で、『蜂の寓話』からマンデヴィルの詩を引用し、5 ページにわたって有効需要論の先駆者としてその内容を解説している。
 - 27) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.167
 - 28) ケインズ (1936) 邦訳, P.363
 - 29) ケインズ (1936) 邦訳, P.364
 - 30) ウェーバー (1905) は、この本において、近代資本主義の原動力となった人々の貯蓄をキリスト教における信仰にもとづく節約と関連づけて説明している。これについては、石橋・関谷 (2012) 「IV 歴史学派の経済学」参照。
 - 31) マンデヴィル (1732) 邦訳, PP.21-22
 - 32) マンデヴィル (1732) 邦訳, P.19
 - 33) ハイエク (1978) 邦訳, P.51
 - 34) ハイエク (1978) 邦訳, 54
 - 35) メイソン (1998) 邦訳, pp.16-17
 - 36) ロビンソン (1962) 邦訳, pp.124-125
 - 37) ケインズ (1936) 邦訳, 「序」 xxviii
 - 38) ロビンソン (1962) 邦訳, p.125
 - 39) マンデヴィル (1732) 邦訳, p.327
 - 40) ロビンソン (1962) 邦訳, p.34
 - 41) マンデヴィル (1732) 邦訳, p.228
 - 42) マンデヴィル (1732) 邦訳, p.178
 - 43) マンデヴィル (1732) 邦訳, p.378
 - 44) 『蜂の寓話』でも、労働者が酒 (とくに、ジン) に溺れる様が描写されている。マンデヴィル (1732) 邦訳, pp.84-85

(参考文献)

- 1 石橋春男・関谷喜三郎 (2012) 『経済学の歴史と思想』 創成社
- 2 田中敏弘 (1966) 『マンデヴィルの社会・経済思想』 有斐閣
- 3 田中敏弘 (1984) 『イギリス経済思想史研究』 御茶の水書房
- 4 堂目卓生 (2008) 『アダム・スミス』 中公新書
- 5 山口正春 (2014) 『アダム・スミスとその周辺—思想・経済・社会—』 三恵社
- 6 Galbraith, J. K. (1958), *The Affluent Society* 2nd edition, revised; Boston: Houghton Mifflin 鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』 第二版, 岩波書店, 1970年
- 7 Heilbroner, Robert L. (1998), *The Worldly Philosophers*, c/o William Morris Agency, Inc., New York. 八木甫, 松原隆一郎, 浮田聡, 奥井智之, 堀岡治男訳『入門 経済思想史 世俗の思想家たち』 ちくま学芸文庫, 2001年
- 8 Hayek, F. A. von. (1978) *Studies in History of Ideas*, 八木紀一郎監訳『ハイエク全集第Ⅱ期第7巻』 春秋社, 2009年
- 9 Horne, T. A. (1978), *The Social Thought of Bernard Mandevill: Virtue and Commerce in Early Eighteenth-Century England*; The Macmillan Press Ltd. and Columbia University Press, 山口正春訳『バーナード・マンデヴィルの社会思想—18世紀初期の英国における徳と商業—』 八千代出版, 1990年
- 10 Keynes, J. M. (1936), *The General Theory of Employment Interest and Money*, 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』 ケインズ全集第7巻, 東洋経済新報社, 1983年
- 11 Mandeville, Bernard (1732), *The Fable of the Bees: or Private Vices, Publiek Benefits, with an Essay on Charity and Charity Schools and A Search into the Nature of Society. The Sixth Edition, 1732*, 泉谷 治訳『蜂の寓話: 私悪すなわち公益』 法政大学出版局, 1985年
- 12 Mason, Roger, *The Economics of Conspicuous Consumption —Theory and Thought since 1700* (Edward Elgar, 1998) 鈴木信雄・高 哲男・橋本 勉訳『顕示的消費の経済学』 名古屋大学出版会, 2000年
- 13 Robinson, Joan (1962), *Economic Philosophy*, London: C. A. Watts & Co. 1962, 宮崎義一訳, 『経済学の考え方』 岩波書店, 1966年
- 14 Schumpeter, J. A. (1954), *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter (London: George Allen & Unwin; New York: Oxford University Press, 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史 (上)』 2005年
- 15 Smith, Adam, (1759), *The Theory of Moral Sentiments*. by Adam Smith, Professor of Moral Philosophy in the University of Glasgow, London: Printed for A. Millar, in the Strand; And A. Kincaid and J. Bell. in Edinburgh, MDCCLIX {1979} 水田 洋訳『道徳感情論 (下)』 岩波文庫, 2003年
- 16 Smith, Adam (1776), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. reprinted in R. H. Campbell and A. S. Skinner (eds.) 山岡洋一訳『国富論 上・下』 日本経済新聞社, 2007年
- 17 Veblen, S. (1899), *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York 小原敬士訳『有閑階級の理論』 岩波書店, 1961年
- 18 Weber, M. (1920), *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波文庫, 1989年

(Abstract)

This article tries to reinterpret Mandeville's Fable of Bees in the 17th century from an economic point of view, which made quite a stir in British society at that time. Mandeville captures the prosperity of British society in the modern age as a season of consumption with the radical expression "Private Vices, Publick Benefits." Mandeville's Fable of Bees shows how consumption encourages the expansion of productive capacities, thereby increasing overall employment and income. However, the increase in consumption seems to be an act of disturbance against the morale and behaviour of society for the purportedly simple people of the church. Therefore, the enforcement of the customs was sought for instituted. On the other hand, Mandeville wrote Fable of Bees with the intention of satirizing the upper class, who preached frugality for the common people while indulging in luxuries (conspicuous consumption) themselves. My interpretation of this paper is that its content is inherently meaningful, far beyond a playful satire, and that Mandeville tells us something profound about the coming of the modern civil society.